

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

## 2018 年度先端社会研究所基盤研究部門 活動報告

### ◆ ソーシャル・ディスアドバンテージ班 (SD 班)

代表：三浦 耕吉郎（関西学院大学社会学部教授）

2016 年 4 月に発足した本研究班（以下、SD 班）は、いまだ周縁化されている人びと（LGBT、薬害被害者、薬物依存者、病者、特定労働者、エスニック・マイノリティ、ホームレス、部落差別被害者、災害被災者、高齢者等々）のかかえているソーシャル・ディスアドバンテージ（社会的不利ないし不利益）の解明と、そうした人々への支援実践に関する研究をつうじて、「文化的多様性を尊重する社会の構築」に資することをめざして活動してきた。

2018 年度は、SD 班にとって、三カ年にわたる研究プロジェクトの最終年次にあたっている。したがって、この活動報告は、これまでの SD 班の研究活動の総括としての意味合いを持っている。なお、本プロジェクトの研究課題は、以下の 4 つにまとめられる。

I ソーシャル・ディスアドバンテージの社会的構成に関する歴史社会学的考察。これまでのさまざまな少数者の歴史的析出過程を、個々ばらばらに捉えるのではなく、近代化・国民国家化が何らかの共通する原理に基づきこれを析出しているという仮説の観点からレビューし、それらを世界各地の事例と比較しつつ検討する。

II ソーシャル・ディスアドバンテージの社会的構成の現代的維持過程の研究。こんにちのさまざまな少数者の不利的で差別的な諸状況を維持する原理と仕組みについて、実際の諸状況を記述し分析することで明らかにするとともに、それを世界各地の事例と比較して検討する。

III さまざまな支援実践における困難の記述と分析。難病患者支援、薬害被害者支援、障害者支援、人種民族差別撤廃運動、反ヘイトスピーチ活動、ホームレス支援活動等、さまざまな支援活動のなかで生じる現代的困難を、その実際の活動に参加しつつ、参与観察や相互行為分析などの観点から記述する。

IV 社会還元活動と再帰的分析、新しい理論化。I～III までの研究活動そのものを資料と捉え、これらの資料を、当事者を含めたワークショップやシンポジウムにおいて取り上げ、再帰的に分析する。

以上の課題と研究枠組みを共有しつつ、各研究員が達成した研究成果は以下のものである。

佐藤哲彦（本学社会学部教授）は、社会的に不利な扱いを受けている人々——薬物使用者・薬害被害者・難病患者・セックスワーカー・LGBT など——について、個々のカテゴリーを横断する枠組の探求を通して、それらの人々が置かれている問題状況とその変更可能性について考察してきた。

2016年度は長期留学としてロンドンに滞在し、欧州各地で長年のテーマである薬物使用に関わる人々（使用者、支援者、政策担当者など）にインタビューを行うとともに、いわゆる薬害エイズの被害者である血友病患者らにもインタビューを行った（2016年8月調査）。そこでの発見の一つは、英国やアイルランドをはじめとした欧州には「薬害」や「薬害被害者」というカテゴリーが存在しないことであった。

一方、日本ではとくに1970年代の薬害スモン以降、サリドマイド薬害や薬害エイズなど個別のケースの被害者であるとともに、薬害被害者という一般のカテゴリーによる自己認識が被害者に多く見られる。そこでまずは日本における「薬害」概念の多義性について、『社会学評論』68巻1号（2017年）に掲載された論文で議論した。これをもとに2018年7月にはISAトロント大会で、そのような日本独自の「薬害」概念について報告し議論した。その後、「薬害」概念の成立過程について、1970年代から80年代を対象に、とくに近縁性の高い公害ディスコースとの関係から考察した。その成果は2019年度の保健医療社会学会での発表を予定している。

また、このような研究過程に関連して、2018年2月にはHIV/AIDSをめぐるシンポジウム「エイズと日本社会、その30年の社会的経験」を開催し、司会をしながら薬害エイズ被害者やLGBTのエイズ陽性者らとともに、その経験について議論した。

- ・佐藤哲彦, 2017, 「逸脱研究の論点とその探求可能性：ディスコース分析をめぐって」, 『社会学評論』, 68(1), 87-101.
- ・Akihiko Sato, 2017, “Discourse Analysis of Drug-Induced Sufferings in Japan”, Joint Session of RC 15 and RC 25 “*Languages of Victims: Toward Advocating Contemporary Social Sufferings*”, ISA Toronto, July 21<sup>st</sup> 2018.

白波瀬達也（桃山学院大学社会学部准教授）は、2017年2月にシンポジウム「支援活動から発見されるソーシャル・ディスアドバンテージ：ホームレス支援の現場から」を開催し、北九州市で「伴走型支援」の取り組みを進める奥田知志氏（NPO 法人抱樸）、大阪市でビジネスの手法を用いて野宿者の就労支援を進める川口加奈氏（NPO 法人 Homedoor）のお二人を招いて、先駆的な取り組み事例を紹介した。

そしてさらに、このシンポジウムで得た知見を京都市で多様な生活課題を抱える人々が集うバザール・カフェでの活動に転用するため、積極的な取り組みを進めた。一つはバザール・カフェでおこなわれている「サロン・ド・バザール」（HIV 陽性者・薬物依存・ゲイという3つの属性をもつ者たちの自助グループ）のリーフレット作成である。その際、自助グループへのニーズはあるにもかかわらず、実態がわかりにくく参加しにくい状況があることを参与観察から把握していたことから、リーフレットを当事者たちの意見を聞きながら共同で作成した。このリーフレットは、エイズ治療拠点病院の医療従事者やソーシャルワーカーにも共有されたことから、彼らのクライアント・利用者が新たにバザール・カフェにつながるようになった。

また、2018年度はバザール・カフェではNPO 法人抱樸で実践されている伴走型支援の学習会を5回にわたって開催し、そのエッセンスの応用を図った。うち1回は白波瀬が伴走型支援の成果と課題に関する報告をおこなった。さらに2018年度から、西成区で進められている西成特区構想の

有識者に着任し、これまで不足していた生活困窮者のセーフティネットの形成に向けた提言を進めている。より具体的には伴走型支援の仕組みを西成区のモデル事業にするための準備を進め、2019年度から開始をするまでの段取りをおこなった（詳細は本誌の研究ノート参照）。

- ・白波瀬達也, 2017 a, 『貧困と地域 あいりん地区から見る高齢化と孤立死』中央公論新社.
- ・白波瀬達也, 2017 b, 「あいりん地域における支援のフィールドワーカー単身高齢男性の生きづらさに向き合って」白石壮一郎・椎野若菜『100万人のフィールドワーカーシリーズ第7巻・社会問題と出会う』古今書院.

三浦耕吉郎（本学社会学部教授）は、NPO 法人伊丹人権啓発協会の活動にメンバーとして参与していくとともに、認知症の患者への支援と介護労働のかかえる問題について千葉県内のグループホームで調査を行ってきた。

前者に関連しては、〈ポスト同対法体制〉の隘路とでも呼ぶべき、個人情報保護のため行政による部落の実態調査が困難な状況が生まれた背景として、従来の〈同対法体制〉が「部落」や「部落民」を実体的カテゴリーとして捉えてきたことを指摘し、そもそも近代化の過程で、身分的に存在するはずのない「部落民」が、あたかも実体として存在するような表象が生みだされた点にこそ部落差別の真因が見いだされること（三浦, 2016 a）、そして、被差別部落でのフィールドワークや生活史の聞き取り調査をもとに、「部落」・「部落民」を、差別する側から表象されることによって初めて存在し始めるような関係的なカテゴリーと捉えるべきことを主張してきた（三浦, 2017 a）。

また、後者については、認知症のグループホームにおける利用者・家族・介護スタッフの独特な関係性のなかで、〈利用者本人の意思〉が浮かび上がってくる様を、いわゆる「平穏死」とか「満足死」と呼ばれる自然死（老衰死）の看取りの場面・プロセスに注目することによって分析を試みている。その内容は、「〈尊厳ある生〉のなかでの看取りとは？」「〈医療行為をしない人の死〉はどのように訪れるのか？」「介護スタッフの実践から見えてくる〈本人の意思〉」等々といったもので、独自のソシオグラフィの手法で記述されている（三浦（共編）, 2016 b, 2017 b, 2018）。

以上の研究に用いられた質的調査の方法的課題と支援実践との関連性については、セミナー（「ライフストーリーとライフヒストリー——「事実」の構築性と実在性をめぐって」2017年3月）およびシンポジウム（「質的調査における〈現実の多義性〉と〈解釈の複数性〉——矛盾と葛藤の現場から」2019年3月）を開催して議論を深めてきた。

- ・三浦耕吉郎, 2016 a, 「部落差別の今は……？——「部落」・「部落民」の表象のゆくえ」好井裕明編『排除と差別の社会学 新版』有斐閣.
- ・三浦耕吉郎, 2017 a, 『エッジをあるく 手紙による差別論』晃洋書房.
- ・三浦耕吉郎（共編）, 2016 b, 2017 b, 2018, 『新社会学研究』No.1~3, 新曜社.

金明秀（本学社会学部教授）は、以下の三点にわたる研究活動を行ってきた。

(1) 差別を不公正と規定する規範的理論の検討

わかりやすく言い換えると「差別はなぜいけないのか」に関する理論的研究である。「差別」と

は所属集団にまつわるさまざまな不正義に対して付与される総称であるが、不正義を概念的に内包しているがゆえに、「差別はなぜいけないのか」という問題設定はトートロジーと化してしまう。金明秀は、公正研究の発見を応用することで、この理論的課題の突破を試みた。その結果、差別に関する包括的な把握が可能となり、先行研究では差別の表出形態が2種類あるとされてきたのに対して、実際には6種類存在するという知見を得た。

#### (2) 人種差別に関する実証的研究およびレイシャルハラスメント概念の定式化

2017年3月に公表された「外国人住民調査」に基づいて、日本における人種差別の被害実態について実証的な研究を行った。加えて、ミクロな差別事象をより精緻化するために、レイシャルハラスメント概念を社会学的に定式化した。後者は解放出版社より『レイシャルハラスメント Q&A』と題して上梓した。

#### (3) 在日コリアン青年の民族的アイデンティティに関する実証的研究

在日コリアン青年の民族的アイデンティティについて計量的分析を行った。また、愛知県の朝鮮学校をフィールドとして、美術教育に焦点を当てながら質的調査を行った。

来年度からは、これらの研究成果を発展させて、Intersectionality（交差性＝複合差別）の社会学的研究を行う予定である。Intersectionality とは、エスニシティ、ジェンダー、セクシュアリティ、階級など複数の差別の軸が重なり合うことで生じる相乗効果のことである。フェミニスト法学から提唱された概念であるため、社会学分野においては世界的に研究が乏しい。より正確に言えば、北米の社会学分野では「性、人種、階級」の3カテゴリーが重複する事象について盛んに研究が行われているものの、主たる関心の対象は、それらが交差することで不利益を克服させられてしまうケースであって、複数の被差別要素が重複することで被害が深刻化する社会過程については未解明の課題といってよい。そこで、理論面から Intersectionality 概念を特定化するとともに、質的・量的調査によって被害実態を明らかにする。

最後に、是非とも書きとどめておきたいのは、SD 班のメンバーであった神学部の榎本てる子氏のことである。榎本氏は、この研究プロジェクトの立ち上げの際に、まさしく中心的な役割を果たされたといってもけっして過言ではなかった。氏の助言や働きかけがなければ到底不可能であったはずの、様々な調査実践、ワークショップ、シンポジウム等の実現に尽力され、私たちを新たな研究の領域に迎え入れてくださった。そうした〈生きづらさを抱えたすべての人たちとの共生〉をめざしてきた榎本氏の志半ばでの早世を、私たちは未だに受け入れられずにいるのだが、この場を借りて氏に心からの哀悼と感謝の意を表するとともに、それぞれのメンバーが氏の遺志を受け継いでいくことをここに誓いたい。

2018年度の研究成果は以下のとおりである。

#### ○研究成果

##### (1) 学会発表

佐藤哲彦 “Discourse Analysis of Drug-induced Sufferings in Japan”、19th ISA World Congress of Soci-

ology、2018年7月21日、Metro Toronto Convention Center（カナダ、トロント）。

(2) 講演会

金明秀「学校におけるレイシャルハラスメント」大阪私学人権教育研究会2018年度前期総会、2018年5月8日、大阪私学会館。

金明秀「学校におけるレイシャルハラスメント」八尾市外国人教育研究会総会、2018年5月15日、八尾市文化会館。

佐藤哲彦「ハーム・リダクションのフィールド・ワークから考える」2018年10月14日、阿倍野市民学習センター。

(3) 著書

金明秀『レイシャルハラスメント Q&A：職場、学校での人種・民族的嫌がらせを防止する』2018年5月、解放出版社。

○主催したシンポジウム

2018年度関西学院大学先端社会研究所シンポジウム

「質的調査における〈現実の多様性〉と〈解釈の複数性〉－矛盾と葛藤のなかの認識枠組生成の現場から－」

【日時】2019年3月19日（火）

【場所】関西学院大学大阪梅田キャンパス 1405 教室

【プログラム】

報告：荻野達史（静岡大学）「『多義性』の縮減と保存のあいだで～理論化・関係性・文章作法～」

報告：渡辺拓也（大阪市立大学）「私エスノグラフィーの向こう側－参与観察の20年」

コメント：阿部真大（甲南大学）、伊藤康貴（長崎県立大学）

司会：三浦耕吉郎（関西学院大学）

◆文化表象班

代表：鳥羽 美鈴（関西学院大学社会学部教授）

当初の予定通り、2016年度から2018年度までの3年間をもって、文化表象班としての活動はいったん終結することになる。従って、研究班の中心メンバーである4名、鳥羽美鈴、鳥村恭則、大石太郎、荒山正彦（順不同、敬称略）による3年間の研究成果の概要とともに、それらの成果がどのような形で公表されたのか一部となるがここに記しておきたい。詳細については、研究班の活動記録と各班員の業績についての記載ページを参照されたい。

鳥羽は班代表として、定期的に開催された班会合及び客員研究員の若松邦弘教授との研究打ち合わせにおいて中心的な役割を果たした。研究会合を重ねた結果、文化表象班がキーワードの一つとして掲げてきた「国境」（境界）をイングランドとの間に有するウェールズという新たなフィールドの着想を得ることができただけでなく、相互に連携して現地調査の準備を進め、3年の研究期間のうちに班員4名による共同調査の実現（2018年8月実施）につなげることができた。専任研

究員のハサン・イードゥル氏や先端社会研究所スタッフらの助力に支えられて、文化表象班が主催の先端研セミナーを各年度開催し、班員の研究成果を一般公開することも実現した。

また、鳥羽は口頭発表（英語）というかたちで、釜山外国語大学（2017年3月）及び京都大学（2018年12月）にて開催された国際研究大会において、それまでの研究成果を報告した。前者においては、フランスの移民問題を事例として、このような西欧社会を対象とする研究が日本社会に生きるマイノリティーが抱える問題にどのような視座をなげかけ得るのかを問うた。報告者と参加者の間で活発な質疑応答がなされ、韓国他、アメリカや台湾から参加した研究者から有用な報告であったと高い評価を得ることができた。後者においては、西欧4ヶ国における人々のムスリムの評価、及び在仏ムスリムの宗教実践とアイデンティティを考察対象とした研究の成果を報告した。

民俗学者の立場から文化・表象研究に取り組んだ島村は、世界民俗学史をふまえた民俗学理論の研究、とくに民俗学を国際的・学際的な「ヴァナキュラー（vernacular）文化研究」として再編成する作業に従事した。「ヴァナキュラー」という概念を「何らかの社会的コンテクストを共有する人びとの一人としての個人の生世界において、生み出され、生きられた経験・知識・表現」（『現代民俗学のフィールド』古家信平編、2018年、pp.23、24）として提唱するに至ったことは極めて大きな研究成果である。ミュンヘン大学や華東師範大学などで開催された国際会議でその周知に努めると同時に大きな反響を得た。研究者を対象とするこれらの学術大会と並行して、「宮古島の自然と聖地」をテーマとしたシンポジウム（2017年11月）などにも関わり、多くの地元住民を前に「伝承とのつきあい方」についての講演と活発な意見交換を行うなどして研究と実践とをつなげることに腐心した。

人文地理学を専門としてカナダ地誌を中心に研究に取り組む大石は、英語とフランス語を公用語とするカナダの言語使用状況を現地調査と国勢調査に基づいて明示した（『E-journal GEO』12巻1号、2017年）。さらにフランス語話者のアイデンティティ表象について検討した結果、1960年代以降、カナダからの分離・独立をも視野に入れた活動が活発化するケベック州で「ケベコワ」アイデンティティが強まる動きに影響を受けて、オンタリオ州のフランス語話者は「フランコ・オンタリアン」というアイデンティティをもつに至ったことを明らかにした。また、カナダのアイデンティティを表象するものとしてオンタリオ州東部に位置する首都オタワのカナダ・デーに着目し、その意義について開催過程と開催内容を当時の日刊紙を丹念に収集して精緻に分析することで明らかにした。これら研究成果は、間文化主義の提唱者の一人として知られるケベック大学のジェラルド・ブシャール教授やケベック州政府在日事務所代表を迎えた日本ケベック学会（2018年10月）や日本地理学会（2017年3月）にて報告された。

19世紀に出版された旅行案内書等における地理的表象に着目して研究を進めた荒山は、明治20年ごろから各地に敷かれた鉄道を利用した「鉄道旅行」や、大型化と高速化がすすんだ船舶を利用した「海上旅行」という新たな旅行スタイルが普及し、明治末には北海道から九州、さらに植民地となった台湾や朝鮮、樺太、日本の支配下にあった満洲なども旅行の目的地となったことを明らかにした。そして、大正期には旅行が社会にさらに浸透し、昭和前半期にかけて大きなブームとなる過程を検討して、近代旅行史を提示するに至った。特に海上旅行案内書の分析からは、「船旅」が「明治・大正の旅行」を特徴付けるものであり、その背景には明治初期に設立された大阪商船会社

と日本郵船会社による定期航路網の拡充とそれによる旅行空間の拡大があることを指摘した（『関西学院史学』44号、2017年）。また、外地・植民地の表象をツーリズムという現象を生み出した近代日本社会との関りから分析した成果は、先端研セミナー（2018年2月）において報告された。同セミナーでは、それまでに収集した貴重な一次資料の数々を一般参加者の前に公開することで知の共有もなされた。

先端社会研究所の研究支援を得て、文化表象班としては以上のように多くの研究成果を出すことができたとともに、その成果を広く国内外や研究者以外の人々にまで発信することができたと考えている。ただし、引き続き収集を必要とする資料があることと流動的な社会の動向を継続して追う必要性から、3年という区切りによっては十分な分析ができずに、いまだ分析過程にある研究課題もあり、班員の構成と役割分担および共通テーマを再検討して新たな班活動を始動することを検討中である。

#### ○現地調査

調査地：ウェールズ（イギリス）

期間：2018年8月24日（金）～8月27日（月）

調査出張者：鳥羽美鈴、島村恭則、大石太郎、荒山正彦

概要：ウェールズ野外博物館と保存鉄道を訪問調査するとともに、イングランドとウェールズの国境（境界）を訪れ言語調査を実施した。現地での聞き取りと資料収集によって、ウェールズにおける野外博物館の成立経緯、保存鉄道の文化的利用、そしてウェールズ語弾圧の歴史と復興についての知見を深めることができた。

#### ○研究成果

##### (1) 学会発表

大石太郎「カナダのアイデンティティを表象する首都オタワのカナダ・デー」第10回日本ケベック学会全国大会、2018年10月13日、愛知大学名古屋キャンパス。

鳥羽美鈴“The Coexistence of Islam with Western Europe”、AFOMEDI国際学会、2018年12月23日、京都大学。

##### (2) シンポジウム発表

若松邦弘「イギリスにおける地方の政治疎外とEU離脱の動き」シンポジウム「ヨーロッパ・デモクラシー：その危機、転換の課題」、2018年6月2日、立教大学。

##### (3) 著書

若松邦弘「『普通の人』の政治と疎外：EU問題をめぐるイギリス政党政治の困難」宮島喬・木畑洋一・小川有美編『ヨーロッパ・デモクラシー：危機と転換』岩波書店、2018年4月、pp.51-72。

##### (4) 論文

若松邦弘「欧州懐疑のなかの排外主義：イギリスにおける『移民』争点」『レヴァイアサン』第62号、2018年5月、pp.27-47。

○主催したセミナー

第5回先端研セミナー

日時：2019年2月15日（金）16:00～18:00

講師：大石 太郎 氏（関西学院大学国際学部 教授）

題目：カナダのアイデンティティを表象する首都オタワのカナダ・デー

会場：社会学部棟 セミナールーム2

◆グローバル化とモビリティ班

代表：鈴木 謙介（関西学院大学社会学部准教授／先端社会研究所副所長）

「モビリティ班」では、複数のセミナー（先端研セミナー）を主催した。いずれも学内外から多くの来場があり、研究課題を議論し調査の成果を社会に還元する良い機会となった。また、2月にはシンガポールで当地における食を中心としたグローバル化の実態について調査を行った。毎週火曜日には、モビリティ班の活動や研究課題をより広く周知し、同様の関心をもつ大学院生・研究員と研究を深めるため、勉強会「リサーチミーティング」を開催した。この勉強会では、参加者がモビリティ班の研究課題に関連する自身の研究や最新の研究動向を発表し合った。

○研究成果

(1) 講演会

鈴木謙介「ソーシャルメディアとオーセンティシティの構築-『インスタ映え』の観光社会学的考察」(招待講演) 観光学術学会第7回大会、2018年7月7日（土）、二松學舎大学。

(2) 論文

鈴木謙介「ウェブ時代のコミュニケーション-〈多孔化〉した時代の中で-」『日本コミュニケーション研究』46(2)、2018年6月、pp.117-129。

鈴木謙介「ウェブ時代のセルフ・デザイン論」『人文論叢』第101号、2018年10月、pp.1-22。

○主催したセミナー

第1回先端研セミナー

日時：2018年6月13日（水）13:30～15:00

講師：柴田 悠 氏（京都大学大学院 人間・環境学研究科 准教授）

題目：AIはどのような時代をもたらすのか？-価値理論と近代化論から考える

会場：先端社会研究所 セミナールーム

第2回先端研セミナー

日時：2018年10月9日（火）17:00～18:30

講師：竹沢 尚一郎 氏（国立民族学博物館 名誉教授／フランス社会科学高等研究院フェロー）

題目：アグリビジネスから食の民主主義へ-今日のフランスの食と農

会場：先端社会研究所 セミナールーム



第3回先端研セミナー

日時：2018年11月20日（火）13:30～16:40

講師：平石 界 氏（慶應義塾大学文学部 准教授）

題目：人間は特別で、特別でないー特殊と普遍をつなぐものとしての進化的視点の可能性

会場：先端社会研究所 セミナールーム

第4回先端研セミナー

日時：2018年12月19日（水）16:50～18:20

講師：白波瀬 達也 氏（桃山学院大学社会学部 准教授）

聞き手：鈴木 謙介（先端社会研究所 副所長）

題目：学生時代に何を学ぶべきかーフィールドと教室のはざまから

会場：先端社会研究所 セミナールーム